

最 終 講 義

大学体育の過去・現在・将来

——神戸女学院大学にみる——

内 藤 純 子

Summary

Fifty Years of Physical Education in the University

Junko Naito

Fifty years have passed under the new education system in the university since it started in 1949, when 'physical education and sports' was introduced as part of the prescribed studies. The history of these fifty years can be divided into three stages and its growth can be traced up to now:

First Stage: the first ten years can be described as 'the cradle period.'

Second Stage: about the next thirty years can be seen as period of improvement and growth.

Third Stage: the shift of physical education to the elective courses category in 1991, as a result of the curricular reform.

Kobe College had been authorized by the educational authorities to start a new university system before the other universities were allowed to do so. The education system of Kobe College had been established from its foundation with the aim at total human education in liberal arts in the tradition of the American education system and method.

The logotype of Kobe College, three leaves of a clover, represent Body, Mind and Spirit. It means that according to the educational philosophy of the college, physical education is regarded as an equally important part of education and study.

Since the Meiji era, physical education had been prescribed throughout the entire period of a student's life in the college. But it was shortened to two years when the new system was introduced.

In considering the development of physical education in the college, in both the curricular and extra-curricular spheres, the following turning points are considered:

The First Point: Start as a new system university (S 23)

The Second Point: Disappearance of the Sports Day from Kobe College Festival (S 40)

The Third Point: Reform of the curriculum (H 9)

The lecture 'Growth of physical Education and Sports in the University' will be presented together with slides and materials.

明けましておめでとうございます。

本日は新年早々にもかかわらず多数の方にお集まり戴き、誠にありがとうございます。このような最終講義の時間を設けていただき、また只今のご丁寧な紹介をいただき有難うございました。

ご紹介頂きましたように、私は1960年に縁あって神戸女学院大学に勤めることになり、今日まで39年間、その前の日本体育大学の勤務と合わせ42年間大学の体育に携わったこととなります。最終講義で何をお話して良いのか随分迷いましたが、神戸女学院大学の体育に思いを込めてこのテーマに決めました。以下、「大学体育の歩み」についてお手もとの資料を参考にしていただきながらスライドを用いて述べさせていただきます。(スライド作成に際し、資料室の若山晴子先生と佐伯裕加恵様到大変お世話になりました。本日もスライドのお世話をお願いしております。)

資料をご覧ください。まず、左側には「全国大学の体育の歩み」に関わる事項を、右側には神戸女学院大学の体育に関する事項について記してみました。中央には歴代学長のお名前と体育関連科目の担当者を、実線は専任、点線は非常勤としての期間を示しました。(検索が不十分であったり、また資料として必ずしも適切でない面もあるのかもわかりませんがお許し下さい。)

先ず「全国大学体育の歩み」をご覧ください。

日本の大学に体育の教科がとり入れられるようになりましたのは第二次世界大戦後のことです。終戦直後、昭和21年米国教育使節団が日本の教育全体をアメリカ流に見直し、指導した報告書の中に、「小学校、中学校、実業学校、専門学校には体育の時間は充分であるが、身体的レクリエーションの機会も少なく長時間勉強しがちな大学生でも、同じような措置が取られるべきである」、即ち「大学においても小学校、中学校、高校と同じように体育の時間を設けることが必要である」というように述べられています。また、「健康教育と体育は教育計画全般の基礎となるものであり、身体検査・栄養・公衆衛生の授業や体育と身体的レクリエーション計画を大学の課程までおよぼし、できるだけ早く諸設備を改善すること」と勧告し、大学における保健体育の必要性を示唆したことに始まります。これを受けて、文部省は小学校から大学に至る一貫した教育システムのなかに体育を位置付けようと昭和22年学校体育指導要綱を公布しました。また、大学基準協会は同年12月、保健体育科目を大学の卒業要件として入れることを承認し、大学に体育教科がとり入れられるようになりました。

そして新制大学が発足し、大学に保健体育科目がとり入れられるようになりましてから50年が経過しました。今日まで大学体育の充実発展への歩みを見た時、以下三つの時期に大別できます。

第一の時期は揺籃期とも言える時期です。新制大学発足(昭和24)により、これまでなかった保健体育科目が突然「必修」となったものですから、前例がないままに試行錯誤的に実践教

育を行った時期です。当初は指導スタッフが質量共に不足しました。また、先に述べたアメリカ教育使節団の勧告にもありますように、施設、設備の早急な改善を迫られながら追いつかず、また学生の衣食住事情、特に食糧事情が悪い時に発足し、（今では考えられないことですが）そのため一時は注目に値する成果が上げられなかったり、いろいろな問題を孕みながらも、ともかく発足しなければならない事情があったようです。

また、新制大学発足当時の大学はさまざまで、古い歴史と伝統を持った旧制大学や、旧制高等学校、旧制師範学校などから新制大学に移行したもの、加えて新たに新設された大学など、歴史と態様の異なる新制大学で「体育のあるべき姿」を追求し、それを定着させていくことは容易でなかったことが想像されます。このようにこの時期は手探りで経験を積み重ねながら、充実を図った文字どおり揺籃期といえる時期です。

資料でご覧いただけますように、関係者の努力により昭和25年に日本体育学会発足、女子体育は女子の手で昭和29年日本女子体育連盟結成、更に昭和27年に「大学体育協議会」が全国組織として設立、毎年研究集会、研究大会が開催され、保健体育教育の充実発展に貢献をいたしました。（神戸女学院大学の西山教授、三宮先生も参加）（新制大学発足から約10年余）

第二の時期は充実・向上・発展の時期です。

保健体育科目の必修に対しては当初よりいくつかの批判の声があがりました。しかし、その都度その批判をバネに更に充実・向上・前進した時期です。（社）全国大学体育連合はそれらの批判に耐え得る「大学体育のあるべき姿」を追求、研究協議し「大学保健体育基本構想」を作成、更に改定を試み、それを教育の場に反映させる努力を重ねてきました。平成元年大学基準協会は大学体育必修論を容認し、体育教科の重要性が認識された時期です。

第三の時期は平成三年、大学設置基準の大綱化の時期です。大学設置基準の一部改定により各大学の自主的判断によって、保健体育の4単位の必修を解いて、必修から選択にすることも、また1、2年の必修はもちろん、履修年限を延長し在学全期間、即ち4年間、あるいは6年間を通して履修することも可能である等、大学独自の姿勢を積極的に反映させることが可能になりました。いわゆる大綱化、自由化、弾力化、さらには個性化が打ち出された時期であります。これは保健体育のみに限ったことではなく、各大学はカリキュラム改革等積極的に取り組み、独自性を発揮する方向に進んでおります。以上簡単ですが全国大学の体育の歩みを述べてみました。

神戸女学院大学は一般の大学より一年早く新制大学の設置が認められました。神戸女学院はアメリカ教育使節団の勧告を受けるまでもなく、アメリカの大学にならったリベラルアーツの全人教育を強調するものであり、その目指すところは教養教育とキリスト教的人格形成の伝統を基盤にした自由人の育成にありました。専門的な狭い研究より広い視野にたち、一般教養についても選択が偏らないよう、学生たちは常に **all round education** ということが強調されていました（百年史 P229参照）。

三つ葉のクローバーに象徴されますように「身体・精神・靈魂の三者の調和の取れた人格の育成」が教育理念としてありました。その一領域である「身体」にかかわる健康教育を基盤に

した体育に関して歴史的に見ますと、

例えば、創立者タルカット先生の徹底した姿勢教育に始まり

二代目校長クラークソン先生のリズム教育導入の指導

三代目ブラウン校長の時には **Body, Mind, Spirit** の教育理念を三つ葉のクローバにかたどった校章の設定

四代目院長ソール先生の時（M41年）体育館の新設

五代目院長デフォレスト先生は姿勢教育 **Head Up!! Chest Up!!** を標語のように使われた。

などにもみられるように、歴代校長・院長により体育は学院の教育理念のなかに位置付けられ実践されて参りました。

①新制大学発足当初、全国の大学において体育指導者が質的にも量的にも不足だったころ、否それ以前に関西に女子体育指導者養成の機関がなかったころ、デフォレスト院長は既に二人の学生をアメリカに留学させ、体育指導者の養成をされました。（そのうちの一人は現在名誉教授の西山敏子先生です。）そして、新制大学発足の際は体育実技を西山、三宮、体育講義市川先生担当でスタートしています。

②体育施設の不足、整備に悩む諸大学が多くあります中で、旧制専門部より新制大学になりました神戸女学院大学では当時、1学年 約200名の学生数からして適正規模の体育館並びに運動場、テニスコートが備わっておりました。したがって、それらの点ではごく自然に体育「必修」は受け入れられたのであります。

神戸女学院は創立当初より昭和23年の新制大学発足に至るまで大小16回の学科組織の改編が行われてきましたが、この新制大学への改編が神戸女学院の健康教育を考える時、最大の変化であったと受け止められます。即ち、本学における健康教育を根底とした体育は第二次世界大戦後半の非常時体制中は別として、明治初年の創立以来いずれの時代においても、学院の組織がどのように変わろうとも全学年必修でありました。運動、体操など言い表し方は異なっても、その目指すところは学院の教育理念に基づく教育の一環としての体育・健康教育として、各学年とも必修科目として組み込まれていたのであります。この点から見ますと、新制大学になってから、便宜的に1～2年に縮小されてしまい3～4年は体育はなしとなり、学院の理想から言えば一歩後退したといわねばならないでしょう。この2年間に縮小された体育をどのように指導展開すべきか、担当教師の研究努力は重ねられたことでしょう。他大学の情報を求め、全国組織である大学体育協議会（現在の全国大学体育連合）研究集会等に出席され研鑽を積まれたことと思います。（記録に残っているものの中で、目に留まったものだけですが、資料の中にお名前を入れさせて頂きました。）

神戸女学院大学における体育の歩みを考えます時プリントに示しましたように、大別して三つの転換期が考えられます。

第一の転換期はただいま申し上げた新制大学発足の時期です（S23）

第二の転換期は大学祭から **Play Day**（スライドをご覧ください）が姿を消した時（S40）



(明治40年) 自治会創立記念の銀杏の木。
山本通りから岡田山に引越した昭和8年に中高部の渡り廊下に移植された。自治会の成長と共に立派に成長している。(内藤撮影) (めぐみ48号1962.12発行参照)

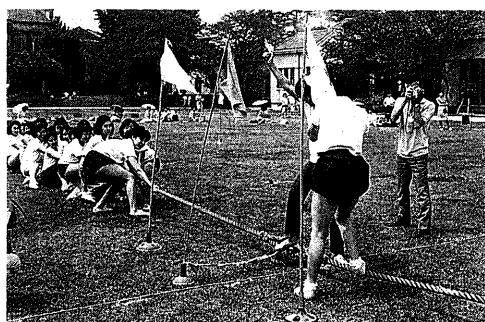
第三の転換期は大学設置基準の一部改定によりカリキュラム改革が行われた時期（H9）

教育の一環としての体育にかかわる領域は、基本的に三つの柱が考えられます（プリントをご参照下さい）。正課体育と課外体育は車の両輪のような存在です。体育担当者は正課体育の指導にとどまることなく、課外体育においてもその活動を積極的に指導援助する必要があります。また全人的教育を目指すからには学生生活の指導を行っている学生部との連携による活動が大切です。プリントに正課体育、課外体育に関わる関連事項をいくつか列挙してみました。体育施設が大きく関わります。以上のことを念頭に置いて頂き、神戸女学院大学の体育の過去・現在をスライドを通してご覧いただきたいと思います。

自治会が誕生したのは明治40年で、整理部、運動部、風俗部の三部があり、学生・生徒はすべて自治会員であり、同時に運動部員と考えられました。自治会創立10周年に当たる大正6年の活動状況の中で、運動部長は『校内に「体育に対する観念のいちじるしく発達」したことを喜び、（中略）生徒全体は毎朝始業前の5分間を深呼吸に費やし、寄宿舎においては、就寝前に一同外に出て同様の深呼吸運動をなし、健全なる身体と明晰なる頭脳を養わんとす。かくして後日社会に活躍し、世のため神のためにも抜きんでて尽くす人の多く出んことを期す』と述べ、運動部長自ら健康に関するしっかりした理念を持つリーダーとして、その任に当たってい



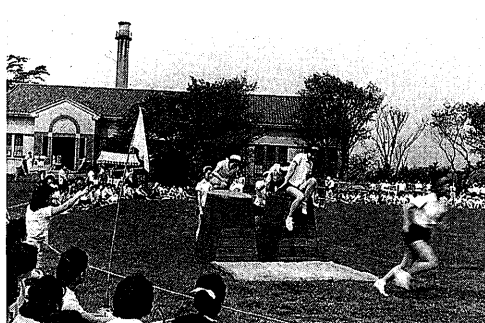
Play Day 入場行進



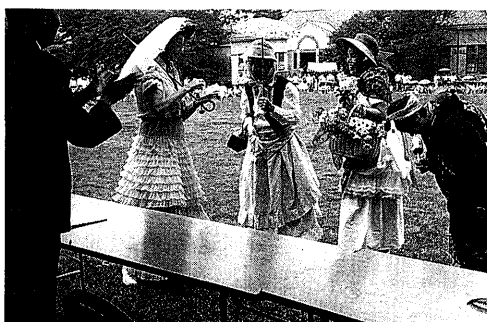
Play Day 綱ひき “用意!! ドン!!”



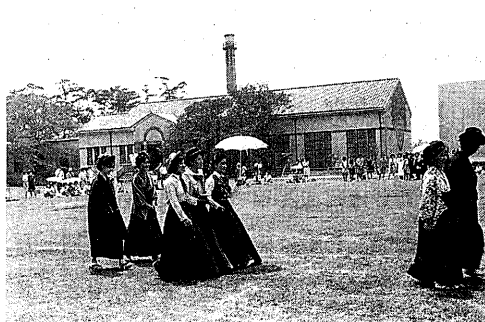
Play Day 綱ひき



Play Day 障害物競争(跳び箱)各学年15名参加



Play Day 着せかえ競争で採点をうける教授たち



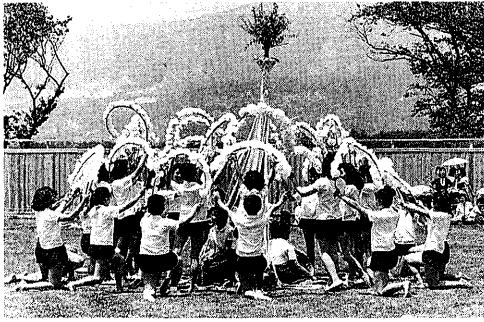
Play Day 仮装行列(文明開化)



Play Day テントの中からお見覧の教職員の皆さん



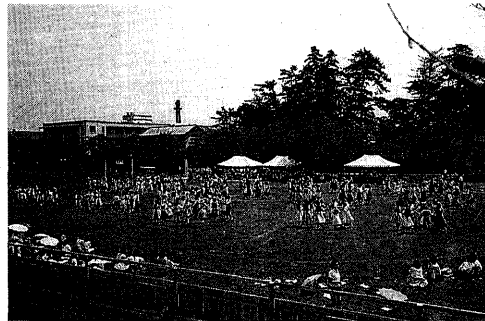
Play Day クラブ紹介(元体育顧問西山敏子教授)



Play Day メーポールダンス (花輪をかざして)



Play Day フォークダンス (文学部1・2年) (ロシア) カニリンスカヤ?



Play Day フォークダンス チェコスロバキア
村の踊り (文学部1・2年)

たことが伺えます。寮では、毎朝朝礼の前に寮長の指導による朝の体操が行われ、通学生の参加が奨励されました。このように一日のつとめは先ず運動で始まり、礼拝、授業が続いたのです。即ち、体育、知育、霊育の理想が実行されていたのです。 (スライド1枚)

運動部の最大の行事は秋の運動会で、これは中高部、大学部合同で行われていました。この合同運動会は昭和25年(創立75周年記念大運動会)をもって終止符がうたれました。学院の自治会運動部としては史上で第一の転換期と言うべきかもしれません。合同運動会は生徒・学生の増加、年齢の相違から生じるずれなどで必然的な結果ではありました。 (スライド8枚)

昭和34年(新制大学設立10周年)記念の特別な催しとして第一回大学祭が企画されました。従来別々に行われていた運動会と文芸会が創立者記念日を中心に大学祭として開催され、前夜祭は音楽会、翌日の運動会は Play Day として全学生を主体とする学生の企画で、院長、学長、教職員と学生が、五月の緑一面に染められたキャンパスでダンスやゲームに心ゆくまで行い青春のエネルギーを発散させたのでした。 (スライド7枚)

第二回大学祭は神戸女学院創立85周年記念として開催されました。大学祭の一環として行われた Play Day は1960. 5. 18の開催で、開会式は礼拝に始まり9:00~9:15(15分間)山田基男チャプレンの司会、難波紋吉院長・学長の開会挨拶がありました。Play Day は全学生の参加で、1、2年は全員演技に出場しました。メイポールダンスやマスゲーム、各種競技、クラブ紹介、フォークダンスという内容で、院長・学長をはじめ、日頃グラウンドには滅多に姿をお見せにならない先生方、宣教師の先生方、職員の方々がテントの下で観戦し、また競技に参

加され、最後には全員が手を取りあって緑輝く太陽のもとに楽しくフォークダンスを行い、学生と教師のコミュニケーションの場となっていました。

大学祭は回を重ねて、今年度(1998年度)40回となり、その内容も大きく変わってきました。大学祭の一環としての **Play Day** に一日が当てられ、体育の授業の成果を皆様の前に披露したり、年に一度許された教師と全学生が集い、気楽に交わり合う **Play Day** も昭和40年(第7回大学祭)まで続きました。しかし、その後は正課体育受講生をも含んだ全員参加は姿を消し、**Play Day** は **Sports Day** に変わり、やがてそれも無くなり、一角にてダンスパーティーが開かれるというように姿を変えて行くことになったのです。

長く続いてきた伝統が絶たれ、年に一度許された教師(教職員)と全学生が教室外で気軽に交わる場が失われたことは誠に残念なことです。正課体育と課外体育が車の両輪のような存在であることを考える時、このような形の **Play Day** が大学祭から姿を消してしまった時期は、神戸女学院大学体育の歩みでは第二の転換期と言えるでしょう。

神戸女学院教育の理想の一角である体育の場は、このように正課体育と自治会体育部、体育系各スポーツクラブに限定されて行きます。クラブ活動について申しますと、戦後一時水泳部が結成されましたが、間もなく姿を消しました。記録に残る最初のクラブは軟式テニス部で、24年にはバレーボール部、25年にバスケットボール部、26年に分離独立した硬式テニス部、28年に卓球部、スケート部、29年にゴルフ部、バドミントン部、以上8クラブがありました。

学生課が設置されたのは29年で、この頃から初めて自治会の文化系、体育系のクラブのガイダンスが組織的なものになりました。その後、37年にワンダーフォーゲル部、38年にスキー部(H3に競技スキー部と改称)、44年馬術部、59年スカッシュラケット部、H5年ラクロス部、H7年剣道部、H9年合気道部、チャリーディング部が誕生し、休部、消滅も含め、現在(1998年)体育部の下に体育系クラブは18団体(15クラブ、1同好会、2愛好会)がありますが、諸大学が部員減少の方向で悩んでいるように、本学の各クラブも曲がり角に来ているように思います。(スライド20枚)

自治会体育部の対外活動として近畿地区大学体育大会への参加がありました。この大会は国公私立の各大学が参加する総合体育大会で、昭和29年を初回として年一回開催されていましたが、私学参加は第八回で終止符が打たれました。その後、公立大学も参加できなくなり、現在は国立大学のみのお大会となっているようです。

DKK スポーツクラブ対抗戦があります。DKK とは同志社女子大学、京都女子大学、神戸女学院大学の三女子大学の頭文字に由来します。体育系クラブがスポーツを通して互いに交流を深め、より一層発展することを目的とした大会です。1993年3月、同志社女子大学(田辺キャンパス)で第一回を開催、以後毎年一回開催、当番校は持ち回りとなっております。神戸女学院大学は第二回、第五回を担当、スポーツ競技形式ではなく、運動会形式で行いました。

(スライド9枚)

1998年5月1日(金)、クラブ活動交歓会の第一回が神戸女学院講堂で開かれました。自治会クラブ活動は教育の一環として行われるものであり、多くの学生に活動を理解してもらい、



DKK スポーツクラブ対抗戦優勝カップ返還
(1998. 3. 7)



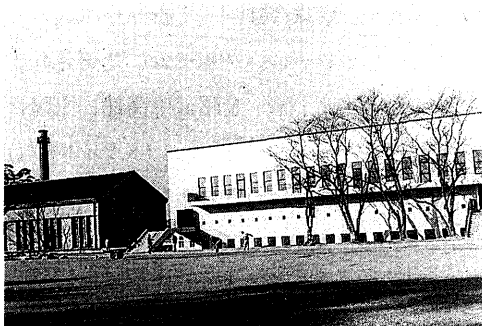
DKK スポーツクラブ対抗戦宣誓をする同志社女子
大学・京都女子大学・神戸女学院大学の代表者

自治会クラブ活動を活性化させたいとの願いをもって開催されたものです。クラブ紹介及び活動報告、クラブ代表者と顧問の紹介に続いて松沢貝子学長の挨拶があり文化系クラブ25（21クラブ、2同好会、2愛好会）、体育系クラブ18（15クラブ、1同好会、2愛好会）に大学クローバー賞が授与されました。賞状には次のように記されております。「あなたがたは、この一年間課外活動に励み、個人・団体のわざを磨くと共に部員相互の絆を強くし、さらに学外の人々との交流をも深められました。そんなよき活動ができたのも、日頃からあなたがたが精神・靈魂・身体を健全な状態に保つことに心がけ、これら三つを調和させる努力を怠らなかったからでしょう。あなたがたの存在は神戸女学院の誇りです。あなたがたの一年間の努力と成果を讃え、今後ますます活躍されることを祈り、ここに大学クローバー賞を贈ります。」（スライド2枚）

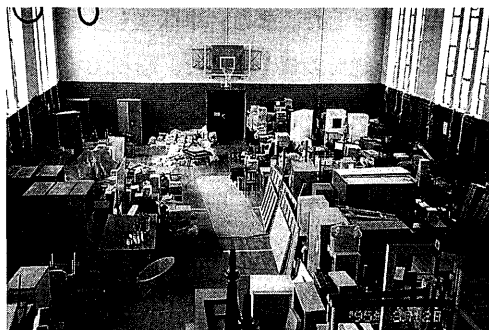
各クラブ間の親睦とリーダーシップ養成を目的として昭和39～44年、自治会体育部はリーダーズ・セミナーが開催されました。記録では、御影ユースホステル、芦屋奥池ユースホステル、服部緑地ユースホステル、芦屋公民館などを利用しております。しばらくの間休んでおりましたが、学生課長のご支援により、昭和61年からリーダーズキャンプの名のもとに再開されました。今年まで13年間、一泊二日の日程で六甲セミナーハウスで続けております。（スライド5枚）

続いて、体育関連施設についてお話しします。

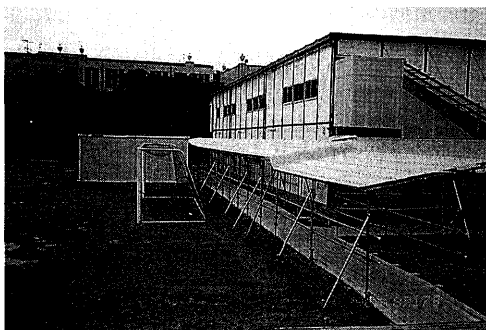
先ず大学体育館です。新体育館ができた頃から、誰いうとなく旧体育館と呼ばれております。神戸女学院が岡田山に移転した昭和8年、専門部体育館として設置されたもので、体育館建築募金運動に特にご尽力下さった方を記念してガダード体育館と命名されています。1クラス30人を想定した体育館で、当時としては立派なものでしたが、学生数の増加と時代の変化に伴って手を加えられております。50分授業を行っていた頃でも、授業の前後に体育室、更衣室、階段、ギャラリー等分担をきめ学生の手で清掃を行っておりました。特に更衣室の床はモザイク調に貼られ、趣き深いもので、皆で大切に守っております。更衣室にはロッカーが配備され、学生各自に割り当てられていましたが、学生数増加のため昭和49年から二人に一個となり、その後それでも追いつかず、ロッカーの割り当ては中止され、授業の時のみの使用と変更されております。ロッカーの数もさることながら、更衣するスペースが窮屈になったこともその理由のひとつです。個別に区切られたシャワーが10個ありましたが、これもスペースの問題で撤



新体育館竣工 左は大学体育館 右は新体育館
(1965. 1)



震災直後の大学体育館 (1995. 3)



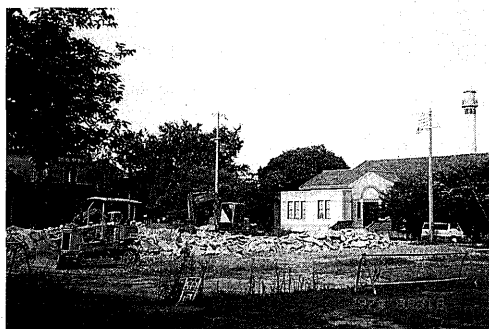
グラウンドに建つプレハブ校舎 (1996. 8)



体育館とプレハブ校舎をつなぐ渡り廊下 (1996. 8)



震災後1年7ヶ月(震災後のグラウンドの状況) グラウンドに建つプレハブ校舎 (1996. 8)



プレハブ校舎撤去後のグラウンドの状況 (1997. 8)

去されました。

(スライド1枚)

新体育館は創立90周年記念行事の一環として昭和40年1月に建設されました。地下1階地上3階のこの建物は、地下部分は倉庫、地上部分の1階には卓球室、体育系クラブの部室、管理室、更衣室、シャワー室、小ロビーが設けられ、2階にはバスケットボール、バレーボール、バドミントンなどのコートに使用できる床と各種式典を行うためのステージが設けられていました。3階には観覧席とギャラリー、東側にバルコニーが設けられております。昭和55年、改装工事をし、東西のギャラリーを削り、ステージを撤去し2階式用具庫に改装、側壁1面に鏡を取り付ける、バスケットゴールを伸縮性のものにする、ブラインドを取り付けるなどの大改

造がなされました。また、卓球室も多目的に使用できるよう、卓球台はすべて折り畳み式とし移動可能な鏡を設置しました。昭和58年には1階小ロビーをトレーニングルームに変更されました。新体育館は大学と中高部が共同利用し月・水曜は大学、火・木・金曜は中高部、土曜日は大学・中高部のクラブ活動にとそれぞれ割り当て使用しています。(スライド9枚)

次は水泳プールです。創立80周年事業として昭和33年7月に家庭会の寄付金により校庭テニスコート西側に建設されました。プールの大きさは長さ25m、深さ1～1.25mです。建設当初は、夏休み初めに中高部の水泳講習にのみ使用され、その他は自由水泳としての使用であったため、大学では正課体育の中に昭和34年から5年間水泳授業を取り入れました。また、夏休み中はプール委員会(現在は体育施設運営委員会)の取り決めによるプール使用規則に従い、神戸女学院学生、生徒、教職員、同窓会員およびその家族のためにプールが開放されました。このプール監督は教職員と補助学生2名がその任にあたり、すべて奉仕で行われていましたが、いつのころからかアルバイト制となりました。(スライド1枚)

テニスコートは校庭北側に4面あります。昭和8年、移転当初よりスペースは確保されていましたが、整備されていたのは2面で東側コートには練習用壁が1面取り付けられました。昭和48年2～4月にテニスコートの改修がなされ4面が整備され、練習用壁はコートの外に移されました。(スライド3枚)

屋外コートは新体育館の北側、校庭の北西側に昭和46年に1面増設、現在2面を使用しています。

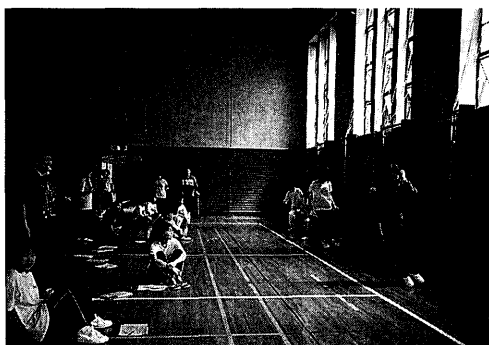
次は校庭(運動場)です。藤棚前は一面の芝生で体育活動や絵画教室、ホームルームなど多目的に利用されてきました。しかし、全学的に体育活動が盛んになったため、芝生に関する懇談会や数回にわたるグラウンド委員会で協議の結果、芝生のスペースをグラウンドとすることを決め昭和46年7～8月にグラウンド・トラック(200m)と直線コース(100m)を造成し、同時に西側に低鉄棒を新設、前述の屋外コート1面を増設し現在に至っております。

平成4年、谷門広場をサブグラウンド用に造成工事が進み、その一角にゴルフ練習用ネットが設置されました。

次は岡田山ロッジです。昭和55年、同窓会館新築にともない旧同窓会館(昭和8年建設)をグリーンウッド西側に移築・改装して合宿などに使用していたのですが、阪神大震災で倒壊してしまいました。学生寮が新たに建てられ、南寮が空いたので現在それを岡田山ロッジとして利用することになりました。

平成7年1月の阪神淡路大震災に際しましては、大学体育館は一時荷物置場となりました。グラウンド南側には仮設校舎が建てられ、グラウンドの東側は土置場となり、復旧工事の都合で屋外運動場は狭められました。復旧工事中車の横断道路の一部となっていた体育館への渡り廊下は平成9年8～9月に修復工事が行われました。仮設校舎撤去後の芝生も手入れされ、平成10年春には桜とともに見事によみがえりました。(スライド8枚)

次に体力測定についてお話しします。体力測定は、1年必修科目の健康スポーツ科学の授業の中で行っている体力診断テスト、身体組成測定のことです。学生各自に自己の体力を認識させ、



体力測定①



体力測定②

健康・体力の維持増進に向けての生活設計を立てさせる、言い換えれば学生に自分の体力を知ってもらい、今後の生活、行動の改善に努力を求めることを目的としております。

測定項目は 形態（身長、体重）・肺活量
身体組成（体脂肪量、除脂肪量、体脂肪率、BMI、肥満度）
筋力（背筋力、握力）、柔軟性、持久力、バランス
瞬発力、敏捷性 などです。

資料に示しましたが、文部省体育局は昭和39年4月に、オリンピック東京大会の年を契機に「スポーツテスト実施奨励」の通達を出しましたが、神戸女学院大学では既に昭和31年から実施していました。同年大学体育協議会（現在の大学体育連合）は正課部会でとり上げている測定項目として身長、体重、垂直跳び、サイドステップ、体前屈による柔軟度、連続片足跳びを挙げています。本大学では昭和35年ころより、2年間必修体育実技の中で1、2年、前期・後期每学期授業開始第2週目に体力測定を実施してきました。しかし近年になって二回生の授業が非常勤講師担当のケースが多くなり、二回生の測定は困難になっています。このことは正課体育実施上の大きな問題点であります。

（スライド4枚）

次に、「女子学生の生活と健康・体力の実態に関する研究」について少しばかりお話しします。これは平成10年10月に第49回日本体育学会で全国大学体育連合近畿支部会の共同研究として発表したものです。なお、平成8・9年度、上記近畿支部会の事務局を大学のご理解のもとに神戸女学院大学が担当し、山内祥史学長に会長をお勤め頂きました。その近畿支部会の共同研究を通して、女子大生のライフスタイルの現状を見ますと、不健康な状況にあります。

アルバイトが多く（62～68％）

全般的に、睡眠時間は少なく、しかも夜型タイプ

就寝・起床時刻が不規則のものが多く、睡眠程度は「浅い」

運動実施の頻度・量は少なく、運動不足を感じている者75％前後と多い

食事は朝食を毎日とる者70～80％いるが

摂食時の様子は食欲旺盛とするものは朝食で23～25％と低い

嗜好では飲酒者率は61～67％、喫煙者率は6～13％であった

健康の自己評価は「不健康」とするもの 22～26%と少ない

体力の自己評価は「低い」とするもの44%と多い

以上、「女子大学生の生活と健康・体力の実態に関する研究」から現在の女子大学生のライフスタイルには憂うべきものがあります。

成人病を改め生活習慣病とした意味を考えてみましょう。健康的なライフスタイルの形成が叫ばれている今日、生活習慣病の予防の一要素である主体的な健康行動の実践が青年期に特に望まれます。しかし、期待とは裏腹に青年期には健康の保持増進を目指した行動が余りなされておられません。

私ども体育研究室は、今回のカリキュラム改革で、資料プリントに示しました如く、従来1・2年必修だった体育を1年のみ必修（健康スポーツ科学）、2～4年学生にはいろいろな種目を自由に選択できるようにとの配慮で生涯スポーツコースを設定しました。しかし、指導者の意図するところと学生の認識、あるいは価値観は必ずしも一致せず、むしろ裏腹の結果で、選択者の数は極めて少ない。何故でしょうか。広報が徹底していないのでしょうか。専門重視に偏ったためでしょうか。まだ一年目の実施だけですのでもわかりませんが、生涯体育にもつながるこの生涯スポーツコースは是非とも多くの学生に選択していただきたいものです。先の「女子大学生の健康・体力の実態に関する研究」からも伺えますように、生活習慣病の下地は既に青年期に作られつつあります。若い時代に特に身体的成長完成期に当たる大学時代にしっかりした健康・体力の基盤を築いていただきたいと思います。

目に見えるようで見えない部分の多い身体を知る。

体を動かすことにより、どう変わるのか。実践、実証して頂きたい。

体を動かす喜びを体験し、スポーツの面白さを体験し、

運動文化・スポーツ文化を次の世代に伝承していただきたいと思います。

また、女性としての立場から考えれば、妊娠、出産、育児に携わる母として、健康なる子孫存続のためにもしっかりした母体を築いておくことが大切です。女性の平均寿命が伸びた現在、少子化社会での女性のライフスタイルを考える時、育児終了後の女性の人生はかなり長期化しております。女性の意識や行動の変化と同時に、そのライフスタイルにふさわしい身体運動の必要性を自覚し、習慣化への努力が望まれます。生涯にわたって、健康で豊かな生活を積極的に築いていただきたいと願います。時間の都合でご説明できなかった部分が多くありましたが、資料でご推察頂けたら幸いです。

皆様のお励ましのもとに、微力ながら何とか定年まで勤めさせていただきましたこと、心より感謝致します。「教えることは教えられること」、学生の皆様に申し上げることは、常に自分にも言い聞かせて参りました。仕事柄、私はお陰様で今日まで病欠欠勤することもなく健康に勤めさせていただき、何よりの感謝でした。拙い講義、授業に目を輝かせてくださった学生の皆様に心より感謝致します。最後に、資料プリントの「将来への展望」は空白にさせていただきました。どうお受け止めいただきましたでしょうか。皆様お一人お一人の思い、お考えを自由にお書き下さい。

創立123年の伝統に輝く神戸女学院の益々のご発展と、健康教育を基盤とした体育教育の発展と、そして皆様のご健康とご発展を心よりお祈り申し上げ『最終講義』とさせていただきます。まとまりのない話になりましたが、最後までご清聴くださいますとありがとうございます。

参考文献・資料

- 1) 大学体育十年誌（大学体育協議会 昭和35年 3月31日）
- 2) 大学保健体育20年の歩み（全国大学体育協議会 昭和48年 3月20日）
- 3) 大学保健体育30年の歩み（社・全国大学体育連合 昭和57年 3月27日）
- 4) 大学保健体育40年の歩み（社・全国大学体育連合 平成 5年 3月19日）
- 5) 大学保健体育協議会 研究集会資料
- 6) 社・全国大学体育連合機関誌
「体育・スポーツ・レクリエーション」第 1号～第15号
「大学体育」第16号～第64号
- 7) 日本女子体育連盟20年の歩み（社・日本女子体育連盟 昭和50年 3月）
- 8) The History of Kobe College（神戸女学院 昭和25年）
- 9) 神戸女学院80年史（神戸女学院 昭和30年10月12日 東洋紙業）
- 10) 神戸女学院100年史総説（神戸女学院 昭和51年10月12日 河北印刷）
- 11) 岡田山の五十年（神戸女学院 昭和59年 4月18日 河北印刷）
- 12) 神戸女学院大学学習便覧 第 1号～第48号
- 13) 神戸女学院大学大学祭 プログラム
- 14) 体育施設運営委員会資料

（原稿受理1999年 4月16日）

資料 I

大学体育の過去・現在・将来 —神戸女学院大学にみる—

平成11年1月8日

最終講義資料

内藤 純子

(全国大学体育の歩み)	(学長)	(体育関連担当者)		(神戸女学院大学の体育の歩み)
		(実技)	(講義)	
・アメリカ教育使節団の勧告	1946 (S15)	常 勤 非 常 勤		・1933(S8)専門部体育館(ガダード体育館 現在の大学体育館)設置
・大学における保健体育の必要性を示唆	1947 (S21)			
・大学基準協会設定(7月)	1947 (S22)			
・「学校体育指導要綱」公布				
・基準協会は「大学の取得単位120及び体育単位4」とし体育を正課とする件を可決(11月)				
・新制大学における一般教育科目設置の参考資料発行	1948 (S23)			・実技は両教師各1つを選ぶこと。不可能な場合は片方を2つとつてもよい(S23~25)
・新制大学発足	1949 (S24)			・P101・P111は1回生, P201・P211は2回生とし, P101とP201は主に体育スポーツ, P111とP211は体育ダンスを行う
・大学体育研究協議会開催	1950 (S25)			・講義:個人公衆及び民族の衛生に関する常識
・日本体育学会設立	1951 (S26)			・テニス:ラケット及びボールは各自持参のこと
・大学協議会設立(毎年研究会・研究大会を行い,その成果を実践に反映し多大の成果を収めた)	1952 (S27)			
・大学体育研究協議会(正課部会,課外部会,保健部会,女子部会に分かれ研究調査を開始)加盟校全国で54校	1953 (S28)			・学校便覧に服装が指定される(白運動シャツ(なるべく木綿)ブルマーまたはショーツ,なるべくバレーシューズ)
・日本女子体育連盟結成	1954 (S29)			・学生課設置(クラブのガイダンスが組織的なものになる)
・近畿地区大学体育大会開始	1955 (S30)			・テニスの服装(白運動シャツ,白ショーツ,テニス靴)
・体育→保健体育に改正	1956 (S31)			・体育講義の中に体力測定実習が入る
・大学保健体育協議会となる(正課部会で体力測定を取り上げている。身長,体重,垂直跳,サイドステップ,体前屈,連続片足跳)	1957 (S32)			・体育実技一般注意:虚弱者又は健康上実技のとれぬ者は担当教師に申し出て適宜指導を受けること
・大学保健体育協議会「大学における保健体育の在り方」を発表	1958 (S33)			・服装:(白運動シャツ,ブルマー又はショーツ,運動靴又はバレーシューズ)必ず学生番号をつけること
・加盟校164校(総合大学84校,単科・短大80校) ※神戸女学院大学は単科大学で加盟(山本純子・女子体育研修部会委員をつとめる)	1959 (S34)			・(7月)水泳プール竣工(創立80周年記念事業として開設) 夏休み中プール監督(教職員と補助学生2名)すべて奉仕
・「大学における保健体育の在り方」は,大学基準協会で承認される	1960 (S35)			・正課体育に水泳の時間を適宜設ける(5年間実施)
・大学保健体育協議会第8回総会研修会(大阪市立大学)(西山・三宮出席)運動能力検査種目内容の検討の報告	1961 (S36)			・第1回大学祭開催(運動会第1日目)
・大学保健体育協議会第9回総会研究会(中央大学)(西山・内藤出席)	1962 (S37)			・第2回大学祭(創立85周年記念) (1日目運動会Play Day)
・大学保健体育協議会第10回総会研究会(研究部会 ①正課 ②課外 ③保健 ④女子 ⑤レクリエーション ⑥研修)	1963 (S38)			・第3回大学祭(1日目 Play Day, 午後 クローバー祭)
・日本学術会議「大学制度の改善について勧告」大学体育を批判	1964 (S39)			・第8回近畿地区大学体育大会参加 (この回が最終参加となる)
・大学保健体育協議会第11回総会研究会(西山)	1965 (S40)			
・大学保健体育協議会第12回総会研究会(西山)	1966 (S41)			・第4回大学祭(2日目 Play Day, 午後 クローバー祭)
・第1回全国大学保健管理研究会開催	1967 (S42)			
・大学保健体育協議会第13回総会研究会	1968 (S43)			・第5回大学祭(2日目 Play Day, 午後 クローバー祭)
・大学保健体育協議会第14回総会研究会(内藤)				・科別入試 開始
・第1回全国女子体育研究会開催(兵庫県主幹・田村富美子兵庫県女子体育連盟会長)				・第6回大学祭(3日目 Play Day, 8:40~3:30)
・大学保健体育協議会第15回総会研究会(西山・内藤)				・自治会体育部リーダーズセミナー(御影ユースホステル)S44年まで継続
・大学保健体育協議会第16回総会研究会(内藤)				・(1月)新体育館竣工(創立90周年記念建設)
・大学保健体育協議会第17回総会研究会(内藤)				・第1回大学祭(創立90周年記念)(2日目 Play Day, 午後サッカーホップ)
・(社)日本女子体育連盟正式認可				・第8回大学祭(1日目 Play Day, 8:45~12:30)
				・第9回大学祭(オープンプレーとなる)
				・ユニバーシアード東京大会(8/26)開会式(9/4)閉会式(体育部より各2名参加)
				・家政学部設置(食物学科・児童学科)
				・(9/30)新寮竣工:大食堂 300人収容

(全国大学体育の歩み)	(学長)	(体育関連担当者)		(神戸女学院大学の体育の歩み)
		(実技)	(講義)	
・第6回国際女子体育会議(東京で開催) (8/18)開会式 皇太子妃美智子妃殿下臨席	1969 (S44)	山口	小川	・(3/18 火) 同窓会定例総会新入会員歓迎会 (大学体育館で行われた最終回である)
・中央教育審議会「高等教育の改革に関する基本構想」の 中間答申提出(大学体育を批判)	1970 (S45)	内藤	小川	・岡田山祭(第11回大学祭)
・中央教育審議会「高等教育の改革に関する基本構想」答申 ・大学体育指導者研修会(文部省との共催で開催)	1971 (S46)	六反	小川	・岡田山祭(第12回大学祭)秋の開催となる
・47年度大学体育指導者研修会(国立淡路青年の家)(内藤)	1972 (S47)	岡本	小川	・(7~8月)グラウンド200mトラック、100m直線コース 造成・ バスケットボール、バレーボールコート 増設・低鉄棒新設
・48年度大学体育指導者研修会(椿)	1973 (S48)	岡本	小川	・大学体育館床の張り替え
・(社)全国大学体育連合発足	1974 (S49)	岡本	小川	・大学体育館更衣室のロッカーの割り当ては2人に1つとなる
・「保健体育の基本構想」作成	1975 (S50)	岡本	小川	・推薦入学制の実施 1年生登録学生 623名、下宿は届出 自由化となる
・49年度大学体育指導者研修会(年3回:夏季・冬季・中央研修会)	1976 (S51)	岡本	小川	・文学部社会科学科を改組し、総合文化学科開設
・50年度大学体育指導者研修会(保健体育の基本構想の具 体化を目的に行われた)	1977 (S52)	岡本	小川	・(4月)六甲セミナーハウス開館
・(4/9) (社)全国体育連合近畿支部会結成大会	1978 (S53)	岡本	小川	・テニスコート横、用具庫、ロッカー室新設
・「大学保健体育基本構想」完成	1979 (S54)	岡本	小川	・P101ab P111ab を P102ab と改め、2時間各期 2/3単位と する(P201,P211 は従来通り50分授業)
	1980 (S55)	岡本	小川	・(10/30) 同窓会館竣工 旧同窓会館移転、改築、改装 「岡田山ロッジ」となる
	1981 (S56)	岡本	小川	・P201 P211 を P212(1)(2) と改め、1時間各期 1/3単位とする
・私大連「大学設置基準の検討結果について」の報告書を 提出(大学体育を批判)	1982 (S57)	岡本	小川	・テニス小屋補修(用具棚取り付け)
	1983 (S58)	岡本	小川	・(7~8月)新体育館改装工事(ギャラリー・換気孔・ブライン ド・鏡・バスケットゴール・用具庫)
	1984 (S59)	岡本	小川	
・大連「基本構想検討委員会」を発足	1985 (S60)	岡本	小川	・新体育館入口ロビーをトレーニングルームに用途変更申請
・61年度全国大学体育指導者研修会(中央研修会、この年 より8月に開催となり、現在に至る)	1986 (S61)	山口	小川	・P225ab 体育学は本年度より専任教師(谷、井上)で担当 (1993年度まで)
・臨時教育審議会「大学設置基準等の改善」答申	1987 (S62)	山口	小川	・体育系クラブリーダーズキャンプ再開(六甲セミナーハウス) 現在に至る
・大学審議会設置法案成立 大学審議会活動を開始	1988 (S63)	山口	小川	・体育系 12クラブ、約100名
・大学基準協会「保健体育のあり方研究委員会」を組織	1989 (H1)	小玉	小川	
・大学基準協会「保健体育のあり方研究委員会」報告の中で 大学体育必修論を承認	1990 (H2)	小玉	小川	・谷門 空地利用について要望が出される
・「基本構想検討委員会」を「大学体育改革委員会」と改名	1991 (H3)	小玉	小川	
・「大学保健体育基本構想」改定	1992 (H4)	小玉	小川	・DKSスポーツクラブ対抗戦(第1回 93.3)以降毎年、年1回 開催
・大学設置基準の大綱化 発表	1993 (H5)	小玉	小川	・人間科学部人間科学学科設置
・大学体育改革委員会は大学連総会で「基本構想、カリキュ ラムモデル、自己評価の成果」を提出、役目を終わる	1994 (H6)	山内	小川	・谷門 空地、サブグラウンド用に造成工事、概ね終了
・平成5年度 大学体育指導者研修会 主題:「大学体育で何を教えるか」Part.1	1995 (H7)	山内	小川	・P233 運動健康学開設(担当 内藤)週2時間 通年4単位
・中国ウェルネス体数研修視察旅行(12名参加)		山内	小川	
・平成6年度 大学体育指導者中央研修会(主管 近畿支部) 主題:「大学体育で何を教えるか」Part.2		山内	小川	
・中国養生法研修視察旅行 研修部企画(15名参加)		山内	小川	
・平成7年度 大学体育指導者中央研修会(主管 東海支部) 主題:「大学体育で何を教えるか」Part.3 シラバスに基づいた授業展開		山内	小川	・90分授業開始
・平成7年度 中国養生法研修会(26名参加)		山内	小川	

(全国大学体育の歩み)	(学長)	(体育関連担当者)		(神戸女学院大学の体育の歩み)
		(実技)	(講義)	
・平成8年度 大学体育指導者中央研修会(主管 九州支部) ・第4回 中国養生法研修会(20名参加) ・H8・H9年度(社)全国大学体育連合近畿支部会事務局を神戸女学院大学に置く 会長:山内 祥史学長 理事長:内藤 純子	1996 (H8)	内藤 井谷 金 北 松 藤 上 谷 衛 島 永 田	内藤 真 藤 菜	
・平成9年度 大学体育指導者中央研修会(主管 中四国支部) 主題:「大学体育で何を教えよう評価するか」 ・第5回 中国養生法研修会(20名参加)	1997 (H9)	▲六 ▲ ▲ ▲ 六 山 真 本 菜 塚 塚 ↓ ▲ ▲ 竹 坂 尾 谷	↓ ↓ ↓	・P102ab を P103ab と改め、健康スポーツ科学 週2時間 各期 各1単位とする ・震災により旧 岡田山ロッジ倒壊(95.1) 9月より旧 南寮を改築し「岡田山ロッジ」として使用
・平成10年度 大学体育指導者中央研修会(主管 本部) 主題:「大学体育の役割と任務」	1998 (H10)	松澤		・P212(1)(2)を廃止, P214 1～8(1)(2) 生涯スポーツコースを開設 ・クラブ活動交歓会(第1回 98.5.1 アセンブリーアワー) ・体育系 15 クラブ, 1 同好会, 2 愛好会

参考文献・資料

- 1) 大学体育十年史(大学体育協議会 昭和35年 3月31日)
- 2) 大学保健体育20年の歩み(全国大学体育協議会 昭和48年 3月20日)
- 3) 大学保健体育30年の歩み(社・全国大学体育連合 昭和57年 3月27日)
- 4) 大学保健体育40年の歩み(社・全国大学体育連合 平成 5年 3月19日)
- 5) 大学保健体育協議会 研究集会資料
- 6) 社・全国大学体育連合機関誌『体育・スポーツ・レクリエーション』第1号～第15号
『大学体育』第16号～第64号
- 7) 日本女子体育連盟20年の歩み(社・日本女子体育連盟 昭和50年 3月)
- 8) The History of Kobe College (神戸女学院 昭和25年)
- 9) 神戸女学院 80年史(神戸女学院 昭和30年10月12日 東洋紙業)
- 10) 神戸女学院 100年史(神戸女学院 昭和51年10月12日 河北印刷)
- 11) 岡田山の五十年(神戸女学院 昭和59年 4月18日 河北印刷)
- 12) 神戸女学院大学学修便覧 第1号～第48号
- 13) 神戸女学院大学大学祭 プログラム
- 14) 体育施設運営委員会資料

資料Ⅱ

最終講義

平成11年1月8日

大学体育の過去・現在・将来

—神戸女学院大学にみる—

内 藤 純 子

全国の大学における体育の歩み

・米国教育使節団の勧告

・新制大学の発足・・・・・・体育が正課必修科目となる

大学保健体育の歩み

- | | | |
|---|-------|------------------------------|
| { | 第一の時期 | 揺籃期 新制大学発足から約10年 |
| | 第二の時期 | 充実・向上・発展の時期 約30年 |
| | 第三の時期 | 大学設置基準の大綱化による自由化、個性化の時期 平成3年 |

神戸女学院大学における体育の歩み

三つの転換期

1. 新制大学発足の時期（昭23） 全学年必修から1～2年必修に短縮
保健体育必修4単位（実技2単位、講義2単位）
2. 大学祭から Play Day が姿を消した時期（昭40年）
一般学生の運動・スポーツに関する意識の変化
クラブ部員数の減少傾向
学生数増加に伴う体育施設の不足傾向
3. 大学設置基準の大綱化による自由化、個性化の時期（平3）
人間科学部の完成年度を迎え全学的にカリキュラム改革にふみきった。（平9）
体育は従来の保健体育必修4単位（実技2単位、講義2単位）を次のとおり改めた

体育学	{	健康スポーツ科学（実技と講義の融合科目）
		1年次必修 通年2単位
		生涯スポーツコース（種目別自由選択科目）

2～4年次に開講、各学期1単位

大学体育に関わる領域の三本柱

- ◎正課体育・・・・・・生活の基本である健康と体力の保持・増進、運動文化の継承と発展等身体運動に対する理解を深める。ひいては、自らの課題を設定し、解決していく態度や能力を養うことを主眼として行う授業としての体育科目である。
- ◎課外体育・・・・・・クラブ活動を含む授業以外の体育活動。自由時間に行われる学生の自主的な身体活動の実践の場である教育の一環として位置付けられるものであり、教育的配慮に基づく指導援助が望まれる
- ◎健康管理・・・・・・健康管理に携わる医師、看護婦との緊密な連絡、協力体制のもとに、体育担当者は主に積極的予防を主体とした健康管理面の役割分担が望まれる

スライドを通してみる体育の過去・現在

- | | | |
|--------|---|---|
| 正課体育関連 | ： | カリキュラム、学生数、担当者、体力測定 |
| 課外体育関連 | ： | 大学祭、運動会、Play Day、体育系クラブ、リーダースセミナー（リーダースキャンプ）DKK スポーツクラブ対抗戦、クラブ活動交歓会 |
| 体育施設 | ： | 大学体育館（ガダード体育館・旧体育館）、新体育館、水泳プール、テニスコート、運動場グラウンド、屋外コート |

将来への展望